

十四、シベリアの地で他界された御霊様方が成仏
されますように、心からお祈り申し上げます。

私は、ここに、シベリアの地で命を失われた多くの御霊様方が、古里日本へ帰られ、それぞれの御先祖様方に迎えられてお幸せな御霊様に発展され成仏されますよう、心よりお祈り申し上げ、稿を終わらせていただきます。

流 転

大阪府 藤原栄暢

敗戦直後（昭和二十（一九四五）年八月下旬）、陣相屯飛行場から安東まで行けば何とかなると言って脱出した第八野戦廠の五人は鴨緑江（国境）をうまく渡れたのだろうか。朝鮮へ入れば日本内地へ行く閘船が出ているとか。荷物をもうこれ以上持てない程持って逃亡した者も、ソ連兵、満人、朝鮮人、という順序に略奪されて、履いている靴まで取られて命からがら逆戻りという連中もいたので、逃亡の決断はちゆうちよせざるを得ない。昼は寝て夜の行軍という目立たない方法で歩いて少しでも日本に近づこうと出発する組、このような状況にあっても色々な情報や噂が意外と早く、また割と正確に伝わるものだ。対空無線分隊の脱出組は、途中、満人達の暴動に遭遇して皆殺しに遭ってしまった。

飛行機隊の七人は安東目指して出発したが、二人が半死半生の憂き目でたどり着くことはできなかった。残りの全員は殺されてしまった。

安東の街はそうした人達や流民でいっぱいにくれて、ソ連軍の監視も厳しく、日本人の行動は一切自由ではなかった。

奉天（瀋陽）、北陵大学、捕虜集結所へ徒歩で連行される頃、婦女子ばかりの日本人難民に遭遇した。

手に手に小鍋と食器、小さな風呂敷包みと、幼い子供の手を取り、背には乳呑子を背負い、全員ほこりにまみれて髪の毛はぼうぼうと、衣服モンペはボロボロになり全くひどい格好でした。

「わたし達は一カ月も歩き通しです」と言って、降ろす背中の幼児が既に死んでいるのさえ気がつかないでいたのです。

避難民の母親達が幼児の死体のそばで泣き伏している光景は全く悲惨でした。

ソ連国境に近い東満や北満から延々と歩き通し

の人々、開拓団員であったという人は、男子はソ連軍と戦うべく手榴弾を二個ずつ持って戦闘に臨み、女子供達は少しでも安全で日本に帰る頼れる道へと南下してきたのです。

最初は二百七十人の大勢の列だったのが、列から遅れて暴行されたり殺された者、途中ソ連軍の空襲や機銃掃射や、満人の暴動に遭遇して死んだ人、高粱畑や途中の道端で体力が続かず弱まり何人もが倒れた。

ソ連兵の婦女子への暴行は人前で平然と行われ、お互いが助けてやる術もなく強姦された。婦人たちも生きていけば日本に帰れるという望み気持ちで、すべてをしのんだ。絶望し諦めて隊列から離れた人、暴行されて発狂した人。娘さんは侵入して来たソ連兵に発見されると、いやがるのを無理矢理、馬車（マーチヨ）に乗せて連れ去られた。起き上がることができなくなるほど輪姦され自暴自棄になっていた。

北陵の集結所で見た女性たちは、断髪、男装、

軍属服に変装した、十八、九歳の女子達ばかり七十人。隊員は集結所からどこへ連行されたのだろうか？

私達捕虜というのは、いつから、どこから、いつの間になつていたのでしょうか？

黒河（ソ連国境）を渡る時も、ソ連側の言う「ダモイ（帰国）」を信じているので何の抵抗もなく、ソ連領を通過して日本へ帰るのだからと。「今日は明治節だなー」と誰かが言った。「あーそうか、今日は十一月三日だなー」と、月日の事も忘れかけておりました。

貨車に押し込まれてシベリア鉄道を走り続け、海が見えた時は「日本海に来たぞー」「やつぱり本当に帰れるのだ」と言つて万歳を叫んだ。

しかし、それがバイカル湖であると分かると意気消沈して、皆はガツカリ、黙ってしまいました。西へ行っているのだろうか、東へ走っているのだろうか、貨車は私達を乗せて走り続けます。

どこへ行くのだろうか、小用や大をするのも大

忙しです。

自分の寝る場所を少しでも離れると誰かに取られてしまう。自分の場所が無くなったり、小さくなったりしており、足を伸ばして寝ることができないのです。窮屈な貨車の中は暗くて、二段式の「かいこ棚」の板の上で、背を伸ばして頭を上げる事はできませんでした。

そんな狭苦しいことにもお構いなく貨車は走り続けて、もう何日間も、今日が何日かもおぼろげで分からなくなり、だまされた事に気付いて半ば諦め、心身共に疲れて来ました。

アンガラ河畔上流付近、ジマー収容所に着きました。

シベリア大平原の広野の端から昇る太陽を仰ぎ、夕には地平線の彼方に沈む赤い燃えるような大きな夕陽を眺めながら、行けども行けども尽きる事のない広大な土地に悠々迫らず運を天に任せて、私達はソ連のダモイの言葉を信じて欺かれ、遙か辺地に連行されて来たことに「しまった」「だまさ

れた」と気付いても今更どうする事もできず、腹立たしく、私達は馬鹿正直と言うのか、戦争が終わったのだからソ連領通過で日本に帰れるのだと護送ソ連兵の言う「ダモイ東京」を気軽な気持ちで、ソ連を簡単に信じて考えていた私達が全く馬鹿らしくなり、極寒の異国でこれからどうなるのだろうと想うと、暗い憂愁な気持ちに包まれました。

「ダワイ、ヴストレー（早くやれ）」の怒号と監視兵の銃剣を突き付けられてまで追い立てられました。

凍傷、疲労、栄養失調等の患者が多く、着替えもなく、風呂もなく、ついには赤痢、発疹チフスが発生し、死亡者が続出し、はるか祖国日本の故郷をしのびながら、戦友の多くがひっそりと息を引き取り凍土の土となりました。

わずかな私物さえも持つ事を許されず、検査は頻繁に行われ、日用品や物は与えられず、黒パンにスープと言っても塩味の汁の中にキャベツの端

切れ二枚か三枚浮いているだけで、とてもやりきれません。

紙などの支給も全くなく、野外便所では用済みの一片の紙切れと葉っぱを併用し工夫したものです。

果てしなく続く荒涼たる雪の原野を眺めながら、初めて敗戦という事実と、捕われの身であるという地獄をひしひしと身にしみ感じて来たのでした。

ソ連当局、共産党では、我々に対する宣伝工作のために、ハバロフスク発行の「日本新聞」を配布し共産主義教育をしたが、紙片が無く困り果ていたので、巻煙草用紙やトイレ用に好都合ではあり、またニュース活字（日本文字）にも飢えていた辛苦の収容所生活の中で、占領軍、進駐、民主化、天皇制、インフレ、革新政治、東久邇宮、幣原内閣等々、断片的ではあるが、おぼろげながら時代の移り変わりと、変化しつつある祖国日本の姿を異国より想像する事ができた。

煙草は「マホルカ」という茎も葉も一緒に乾燥し刻んだ「きざみ」を、新聞紙の端を切つてクルクル巻いて唾で閉じ、火打ち石で火をつけて吸うのが普通で、巻煙草等は手に入らないものでした。

寒々としたラーゲリの中は暗く、上、下、二段式にした板の上に服を着たまま寝た。収容所では外部にはソ連、そうして内部には一部に日本人アクチーブや共産党員を警戒するという妙な雰囲気の状態もあり、重労働の身体の疲れの上になお精神的にも気を配らねばならず、誰かと言葉を交すその一言にも注意して話さねばならぬという、肉体的にも休養する間もなく心身共に大変疲れしました。

心は暗くなり、ある者は無関心を装い、ある者はソ連の歓心を買ひ、また民主主義を考え、またある者は急に人間が変わり、ただ黙々とみんな黙つて、漸次複雑な様相を帯びて来ました。ダモイを餌に誰を先に帰すか、同じ仲間間で昨日まで苦楽を共にして来た戦友から引き離されて、残留を余

儀なくされた。中には特に残留を希望した人もいる。それは特殊な人ではありましたが、しかし事實は違ふのです。民主グループや共産党の強迫と要請によるもので、協力しないなら「反ソ分子」として処置をする。残留の場合は自分から希望して残つたと発表して欲しいと言う。これが事実真相なのです。

こうして帰還部隊（ダモイ）から取り残された者は涙も無く、声も無く、人生の運命の別れ道。しかし、こうして絶えずラーゲリを移動させられたのです。

私達の哀れな姿、頭を下げ黙々と歩きます。時折足がふらつくのです。食糧不足による脚気かもしれない。ただ黙つてラポート（労働）です。

心身も服装もボロボロです、零下四〇度以下の外気ともなれば、寒さよりも痛さがのしかかります。足を引きずり隣の戦友についてただ仕方なくラポートです。賃金も希望も無く、気持ちは鉛色に沈んでいました。

「今度こそはダモイだ」と言うソ連の言葉にまたまた欺かれ、シベリア各地の収容所を転々と移動させられ、厳寒の密林で森林伐採、運搬、建設、土工、炭鉱、コルホーズ、駅の積み荷下ろし、草刈り、穴掘り等あらゆる重労働を強いられ酷使されたのです。

捕虜の一日一日を耐えてしのび、ただただいつの日か日本へ帰る事を信じて故郷を夢見て、互いに励まし肩を寄せ合いシベリアの極寒の原野を苦しみ歩いたのです。せつかく大戦の弾を潜り抜けて死線を越え生きて来た戦友も、ダモイの念願も空しく、あたら若き青春の生命を異国の山野に、遺族への知らせもかなわず、妻や母の名を、我が子の名を呼び続けて息絶え、シベリア大平原の土となり果てて行ったのです。

切に御冥福を祈ります。